

G7広島サミット関連企画展「平和記念都市広島誕生」

まちづくり市民交流プラザ会場解説資料

会期：令和5年(2023年)5月16日(火)～5月21日(日)

会場：合人社ウエンディひと・まちプラザ

主催：広島市公文書館 広島市市民局文化振興課

共催：株式会社みづま工房 二葉の里歴史の散歩道ボランティアガイドの会

はじめに

広島市の歴史は、1589年(天正17年)、中国地方を治めていた大名毛利輝元によって広島城が築城されたことに始まります。その後城主は福島氏、浅野氏と替わりましたが、広島は広島藩の中心として発展し、江戸時代の主要都市の一つでもありました。

明治維新後は広島県の中心として近代都市への歩みを始めましたが、鎮台や師団司令部が広島城内に置かれ、また日清戦争時には「大本営」が置かれるなど、陸軍の軍事拠点である「軍都」としての性格を強めていきました。

日中戦争が始まり太平洋戦争へ突入する中、市民は召集、兵士の歓送、軍需工場への動員、学童疎開などでいよいよ戦争に巻き込まれていきました。

そして、1945年(昭和20年)8月6日午前8時15分、人類史上初めて広島に原子爆弾が投下されました。多くの命が奪われ、広島は一瞬にして廃墟と化しました。城下町の名残を残していた街並みや明治以降も引き継がれていた伝統・文化も、被爆により大打撃を受けました。

今回の展示会は、城下町から発展した被爆前の広島、被爆による廃墟の中から立ち上がり復興した広島、平和記念都市として被爆の実相を伝え「平和文化」を訴える広島の姿と歩みを、街の変化や人々の暮らしに焦点を当て、写真や絵図などの資料から振り返ります。

ロシアによるウクライナ侵攻など核使用の脅威が高まる中、本年5月18日から21日まで、初めて被爆地で開催されるG7広島サミットに合わせて、国の内外の多くの方に「ヒロシマ」だけでなく「広島」の歴史を分かりやすく伝えるため、ビジュアルな資料を用い、解説にも英訳を付しました。

この展示会が、「平和文化」の大切さに思いをはせ、「平和文化」を推進する一人ひとりの思いにつながることを祈念します。

1 城下町広島

1589年(天正17年)、毛利輝元が太田川のデルタの上に城を築き始めた頃、現在広島市の旧市内と呼ばれているところのほとんどは遠浅の海だった。「広島(廣島)」という名称は、この頃から使われ、それ以前は「安芸」「安芸国(あきのくに)」などと呼ばれていた。

城下町は、京都と大阪を模したといわれており、江戸時代、毛利氏の後に藩主となった福島正則の時代にその基盤がほぼ形作られた。城下には城を取り巻く形に武家屋敷、その外側に職人・商人の住む町人町や寺社が配置された。

1619年(元和5年)には浅野長晟(ながあきら)が藩主となり、以来12代250年、城下町は領内の政治・経済・文化の中心として栄えた。この間、干拓によってできた新開地が海に向かって拡大した。1820年頃(文政年間)の人口は7万人近くとなり、江戸・大坂・京都・名古屋・金沢に次ぐ大都市だった。商店が並ぶ街道沿いや、水運の要地である河岸の船着き場付近が賑わい、特に西国街道沿いの中島本町は城下一の繁華街となった。

1 寛永年間の広島城下(「寛永年間広島城下図」)

1619年(元和5年)の浅野長晟(ながあきら)入城から間もない寛永年間(1624～1643)の様子を描いた絵図。城下には、城の周囲に武家屋敷が、その外側に職人・商人の町人町や寺院・神社が配置されていた。この絵図では、武家屋敷は黄緑色、町人町は灰色、寺院は黄色に彩色されている。

町名、寺社名、施設名、武家屋敷の居住者名なども記されている。

1624～1643年(寛永年間)頃の様子／絵図／広島城所蔵

2 江戸時代初期の城下の様子(「広島絵図」)

城下は城を取り巻く形に武家屋敷、その外側に町人町や寺社が配置された。この絵図では職人や商人が住む町人町は黄色で色分けされている。

1645年～1657年(正保2年～明暦3年)頃の様子／絵図／広島市立中央図書館(浅野文庫)所蔵

3 江戸時代中期の広島城下の様子(「広島城下町絵図」)

先の2枚の絵図より新開地が海に向かって拡大している。城下を東西に貫く街道(西国街道)の道沿いに、職人や商人の町人町が広がっている。この絵図では町人町は黒色、寺院は赤色に彩色されている。町名、藩の施設名、武家屋敷の居住者名、寺社名、主な橋名、新開名などが記されている。

1693年(元禄9年)以降に作成され、1715年(正徳5年)以前に最後の修正が加えられている。

1693年～1714年(元禄9年～正徳4年)の様子／絵図／広島城所蔵

4 「芸藩広島城下之要図」より城内

広島城下を8つの区画に分けて詳細に描いた絵図のうち城内の図。

城内は現在の白島町から紙屋町（いずれも現中区）の一带に当たり、外堀と川で囲まれた範囲であった。武家屋敷の居住者名なども書かれている。

1864年～1869年（元治元年～明治2年）頃の様子／絵図／広島市公文書館所蔵

5 芸陽広島茶碓山（ちやうすやま）ヨリ眺望略図

幕末に描かれた絵図。広島城下を西側から俯瞰したもの。新開地の先、右手中央に描かれた島は、今回のG7広島サミットの会場となる「ウシナ島」（宇品島。現南区元宇品町）。19世紀中期（江戸時代末期）頃の様子／絵図／広島市市民局文化振興課所蔵

6 中島本町界隈の賑わい

江戸時代後期の広島の城下町を描いた「広島城下絵屏風」の一部。

中央を通る街道（西国街道）の両側には商店が連なっている。左側の橋は本川に架かる猫屋橋、右側の橋は元安川に架かる元安橋。元安橋の東詰めには、お触れを掲げる御制札場が見える。この場所は河川と道路が交差する城下の中心地で、二つの川に挟まれた中島本町（現在広島平和記念公園となっている地域）は城下一の繁華街であった。

1804～1818年（文化年間）頃の様子／屏風／広島城所蔵

7 猫屋橋（現本川橋）付近の賑わい

橋を行き交う人々や、河岸の倉庫・商店等の建物、廻船、雁木、常夜灯などの河岸の様子が描かれている。

「江山（こうざん）一覽図」は江戸時代に本川（旧太田川）の西岸・東岸の風景を描いた絵巻。現在は所在不明。

1809年（文化6年）元図作成／佐々木駿景錦江作「江山一覽図」より

8 本川を進む管絃祭の御供船（おともぶね）と見物する人々

江戸時代、広島城下の各町は厳島神社の管絃祭の管絃船（御座船）に随行する御供船を出していた。華やかな装飾を施した御供船の出発・帰着時は多くの見物人で賑わった。

1809年（文化6年）元図作成／佐々木駿景錦江作「江山一覽図」より

9 本川の川ざらえの祭り「砂持加勢（すなもちかせい）」

江戸時代、輸送の中心は川船であった。その交通の維持と洪水への備えのため、定期的には川底にたまった土や汚物をさらえ取る「川ざらえ」が行われた。浚渫（しゅんせつ）した土砂を奉仕作業として神社の境内に運び込むことを「砂持ち」と呼び、その作業を、奇抜な衣装を身に付け、山車を引き、楽器を鳴らし踊りながら練り歩いて応援（加

勢）する「砂持加勢」が都市を中心に行われるようになった。

広島では、1862年（文久2年）の本川川ざらえの際に砂持加勢が行われ、町ごとにお囃子を乗せた屋台・山車を仕立てて祭りを盛り上げた。

1862年（文久2年）の様子／瓦版「広島本川川ざらえ町中砂持加勢図」より／広島市立中央図書館（浅野文庫）所蔵

2 近代の広島

明治維新により新政府が成立し、1871年（明治4年）の廃藩置県により全国の藩が廃止された。1889年（明治22年）には「市制・町村制」が施行され、広島は全国で最初の市の一つとなった。

1894年（明治27年）8月、日清戦争が始まると、宇品港が築港され山陽鉄道が開通していた広島は、大陸に兵士や食糧・武器を送り出す兵站（へいたん）基地となった。同年9月には「大本営」が広島城内に移され、天皇が滞在し、10月に臨時帝国議会が開催される等、広島は「臨時首都」の様相を呈した。

その後の相次ぐ戦争により「軍都」としての性格を強めていく一方、市内電車の開通、産業の集積、広島高等師範学校等の教育機関の設置などにより、近代都市へと変貌を遂げた。

1929年（昭和4年）には、近隣7か町村との合併が実現し、人口27万人を超える全国で7番目に大きい都市となった。

10 1894年（明治27年）の広島市街地図

日清戦争が始まった1894年（明治27年）に作成された地図。広島城本丸には「本営（大本営）」、三の丸には「帝国議会仮議院」など、日清戦争開戦に伴い一時的に広島に大本営が置かれた際に設けられた施設名が記されている。

1894年（明治27年）12月／鎌田金次郎発行／広島市公文書館所蔵

11 二葉山から南を望む 1877年（明治10年）頃

写真右側から流れる京橋川の対岸には、内堀に囲まれた広島城本丸が見える。当時広島城内には広島鎮台が置かれており、城の東側（写真では手前側）には兵舎が立ち並んでいた。

1877年（明治10年）頃撮影／宮内庁書陵部所蔵

12 二葉山から南を望む 1921年（大正10年）頃

資料番号11とほぼ同じアングルで撮影された写真。1877年（明治10年）頃に田畑であった中央手前の地域には、1890年に置かれた東練兵場が見える。

1921年（大正10年）頃撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

13 大陸への兵站（へいたん）基地となった宇品港

宇品港に停泊する輸送船を西側の宇品島（元宇品、現南

区)から撮影したもの。宇品港は日清戦争時には大陸への軍用輸送基地としてにぎわった。左端に宇品港の棧橋、その奥に黄金山(おうごんざん)、中央には金輪島(かなわじま)が写っている。

1894年(明治27年)撮影/絵葉書/広島市公文書館所蔵

14 広島大本営跡

1894年(明治27年)の日清戦争開戦時、広島は大陸へ兵士や物資を送り出す兵站(へいたん)基地となった。9月には戦時の最高司令部である大本営が広島城内に移され、天皇が滞在した。右の建物が大本営として用いられ、現在礎石が広島城本丸に残されている。

1920年代後半~1945年(昭和戦前)撮影/絵葉書/広島市公文書館所蔵

15 軍事施設が密集した広島城一帯

広島城一帯を西側上空から撮影した写真。内堀に囲まれた本丸の左下には天守閣、中ほどには第五師団司令部、城郭の周辺には西練兵場や各部隊の兵舎、陸軍病院等の軍事施設が集まっていた。

1927年(昭和2年)撮影/個人蔵

16 東練兵場での騎兵第五連隊の訓練風景

東練兵場は1890年(明治23年)、広島市東部の大須賀村(現南区)と尾長村(現東区)にまたがる地域に置かれた。写真は、第五師団の騎兵部隊の訓練の様子。

1945年(昭和20年)以前撮影/写真/広島市公文書館所蔵

17 広島市街と宮島の鳥瞰図

当時活躍した鳥瞰図絵師吉田初三郎が描いた鳥瞰図。市内電車・宮島線の路線(赤線)と沿線の施設や名所等が書き込まれている。広島瓦斯(がす)電軌株式会社(現広島電鉄株式会社)のパンフレットとして作成された。

1928年(昭和3年)/『宮島広島名所交通図絵』(吉田初三郎作画 広島瓦斯電軌株式会社発行)より/広島市公文書館所蔵

3 戦時下の広島

日清戦争・日露戦争により、広島市内では軍事施設の新設・拡充が進んだ。広島城内には陸軍第五師団司令部が置かれ、主要な軍事施設は広島城・広島駅・宇品周辺に集中した。太平洋戦争末期には、軍用地は市域の約10%に及んだ。日中戦争が始まると、全国から集められた兵士が宇品港から出征し、その歓送風景が市内各所で見られた。

広島の経済は軍需工場を中心に活況を呈する一方、戦局が悪化すると物不足が深刻化した。食料等の配給制などが始まり、市民は耐久生活を強いられ、労働力不足を補うため、学生や女性も軍の施設や兵器工場などに動員された。

広島は、原爆投下までほとんど空襲を受けず無傷の

まま残っていたが、本土空襲が激化すると、広島でも、学校ごとに子どもたちを地方に避難させる「学童疎開」や、空襲に備えた防火訓練、民家を取り壊して防火帯をつくる「建物疎開」などが行われた。

18 広島電気屋上から北望

小町(現中区)の広島電気(中国電力の前身)本店の屋上から、北側の白神社方面を撮影した写真。右側中ほどに国泰寺、中央奥には広島城天守閣が見える。

1935年(昭和10年)5月22日/渡辺襄(のぼる)撮影/広島市公文書館所蔵

19 1939年(昭和14年)頃の広島市街(「大日本職業別明細図 大広島市 第3版」)

主要な官公庁、企業、名所だけでなく中小の商店、宿屋、事業所等も細かく書き込まれている。裏面は事業所や店舗の広告。

1939年(昭和14年)東京交通社発行/地図/広島市公文書館所蔵

20 宇品港に向かう出征兵士の歓送

第五師団に召集された兵士は広島港等から出征した。広島市内では、学校、町内会等の単位で出征する兵士を見送った。小町(現中区)の広島電気(中国電力の前身)本店から撮影。

1936年(昭和11年)4月8日/渡辺襄(のぼる)撮影/広島市公文書館所蔵

21 防火訓練のバケツリレー

空襲に備えて行われた防火訓練のバケツリレーの様子。鷹野橋(現中区)で撮影されたもの。

1944年撮影/写真/林雄三提供

22 広島陸軍兵器補給廠(しょう)に動員された学徒

太平洋戦争後期には、労働力不足を補うため、学生や女性が軍の施設や兵器工場に動員された。これは霞町(現南区)の広島陸軍兵器補給廠で高射砲の整備をする動員学徒を撮影したもの。

1940年代前半撮影/広島市市民局文化振興課所蔵

23 幟町国民学校校庭のイモ畑

戦争により農家では働き手が召集され、人手と肥料等が不足し、食糧生産量が大幅に減った。戦争末期には、食糧不足はより深刻になり、食糧増産のため学校の校庭にも畑が作られ、子どもたちが耕した。

1945年(昭和20年)頃撮影/卒業アルバム『幟町国民学校卒業念』(1945年3月 幟町国民学校発行)より/広島市公文書館所蔵

24 幟町国民学校の疎开学童と保護者

本土空襲が激化すると、学校ごとに児童を地方に避難させる学童集団疎開が行われた。これは疎開先の八重町(現

北広島町)の寺で、面会に来た保護者と児童と一緒に食事する風景を撮影した写真。子どもの中には原爆により家族を失い原爆孤児となるものもいた。

1945年撮影/写真/横上春子(よこうえはるこ)旧蔵

4 原子爆弾投下

1945年(昭和20年)8月6日午前8時15分、一発の原子爆弾が投下され、広島市細工町(現大手町一丁目)の島病院の上空約600mで炸裂した。

爆発の1万分の1秒後に出現した火球からは熱線が放出され、爆心地の地表温度は3,000~4,000℃に達し、約3.5km先でも露出した皮膚に熱傷を負うほどだった。

爆風の最大爆風圧は、爆心地で1㎡当たり35t、秒速440mと推定され、1.8km範囲のすべての建物を大破させた。

半径2km内の約4万5,000の建物はほぼ全壊全焼し、市内の建物の約90%が被害を受け、焼失面積は約13km²に及んだ。

核分裂により放出された中性子やガンマ線などの大量の放射線は、人体の奥深くまで入り込み、細胞を破壊し、長期に渡り人体に深刻な障害を及ぼした。

25 1945年(昭和20年)8月6日

1945年8月6日の原爆投下後、原子雲は高さ1万2200mを超え成層圏に近づくにつれて横に広がった。これは愛媛県松山市沖合の上空から米軍偵察機が撮影したものだ。

1945年(昭和20年)8月6日/米軍撮影/米国国立公文書館所蔵/広島平和記念資料館提供

26 被爆前の広島市街 1945年(昭和20年)7月25日撮影

1945年(昭和20年)7月25日/米軍撮影/米国国立公文書館所蔵/竹崎嘉彦(たけさきよしひこ)調整/広島平和記念資料館提供

27 被爆後の広島市街 1945年(昭和20年)8月11日撮影

1945年(昭和20年)8月11日/米軍撮影/米国国立公文書館所蔵/竹崎嘉彦調整/広島平和記念資料館提供

28 被爆後の広島 商工会議所から一面焼け野原となった南方向を望む 1945年(昭和20年)10月撮影

基町(現中区)の商工会議所から南側を撮影した写真。左手前に旧広島県産業奨励館(現原爆ドーム)、中央に元安川と本川に挟まれた、後に平和記念公園となる中島本町一帯が見える。

1945年(昭和20年)10月1日または2日/林重男撮影/広島平和記念資料館提供

29 被爆前の広島 商工会議所から南を望む 1938年(昭和13年)頃

写真番号28とほぼ同じアングルから撮影された戦前の写真。

左側から広島県産業奨励館の優美な建物、その隣(写真中央手前)に日本赤十字社広島支部の鉄筋コンクリート造と木造の建物、相生橋、そして元安川沿いには旅館等の木造家屋が連なっている。原爆の投下目標とされたT字型の相生橋は、このころ古い木造の橋が残っており、H字型であった。

1938年(昭和13年)頃/松本若次(わかじ)撮影

5 廃墟の中での市民生活

被爆後、生き残った市民は住むところもないまま、悲惨な生活状況に置かれた。傷ついた者を治療する医薬品もなく、元気だった者も原爆症で突然死んでいった。翌年になっても政府からの配給はわずかしかなかく、人々は食糧難に苦しみ、ヤミ市に食べ物を求めた。

市内の国民学校の児童・生徒約36,000人のうち約60%は、市外に疎開して原爆の被害を免れたが、39校のうち75%の学校の校舎は、火災や爆風により全焼・全壊または半壊以上の深刻な被害を受けた。復興が進むにつれ、校舎の再建が大きな課題となった。

戦時中、郊外に疎開した子供たちの中には、両親や家族を原爆で失い孤児となったものも多かった。広島には、原爆で親を奪われた5,000~6,000人の「原爆孤児」がいたと推定されている。

被爆者のなかには、病気や障害で十分に働けない者も多く、生活費や医療費の問題に直面した。また、後遺症による倦怠感から、日々働くことが困難な者も少なくなかった。その後、被爆者援護制度が整えられるまで、被爆者の苦難の時代が続いた。

30 バラックで暮らす子どもたち

生き残った人々は、自宅の跡に焼け残りの資材を集めてバラックを作ったり、残った建物や防空壕を利用して雨露をしのいだ。この子どもたちは、料亭(舟入町(現中区)の「羽田(はだ)別荘」)の庭園の築山にバラックを建てて生活している。

1946年(昭和21年)2月/Stephen Kelen 撮影

31 広島駅前のヤミ市

戦時中から深刻だった食料・生活物資難は、終戦後、より厳しくなった。配給は量が少なく、遅れることも多かった。広島駅前をはじめ交通の結節点では、違法なヤミ市が開かれ、様々な商品が高値で売られていた。写真は、広島駅前のヤミ市。

1946年(昭和21年)撮影/Alexander Turnbull Library 所蔵(レファレンス番号: J-0017-F)

32 「松原町下の段」電車通りのヤミ市

ヤミ市では肉も売っていた。この頃ヤミ市が駅前広場や電車通りの道路にはみ出すようになり、この年7月、郵便局寄りに木造平屋の第1・第2民衆マーケットが建設された。

1946年(昭和21年) / Stephen Kelen 撮影

33 幟町国民学校の青空教室

被爆により校舎を失った市内の学校は、被災・倒壊を免れた周辺の施設を借りたり、屋外のいわゆる「青空教室」で授業を再開した。

1946年(昭和21年) 4~5月 / Stephen Kelen 撮影

34 戦災児育成所の子どもたちとノーマン・カズンズ

ニューヨークを拠点とする週刊誌『土曜文学評論』の主筆ノーマン・カズンズは、1949年(昭和24年)、原爆孤児を支援するため、米国人が原爆孤児の仮親となって生活・進学を支援する「精神養子運動」を提唱した。約600人の原爆孤児が支援を受けたと言われ、手紙や贈物で交流した。写真は、五日市町(現佐伯区)の広島戦災児育成所を訪れた時のもの。

1949年(昭和24年) 8月撮影 / 広島市公文書館所蔵

35 建設中の平和記念資料館の下で遊ぶ子どもたち

1952年(昭和27年) / 明田弘司(あけだこうし) 撮影(寄託資料)

36 原爆被爆者の健康診断

昭和29年(1954年)のビキニ水爆実験により漁船の第五福竜丸乗組員が被爆した事件を契機に原水爆禁止に対する国民の関心が高まり、公的な被爆者援護制度の整備に向けての動きが加速した。1957年(昭和32年)4月、被爆者の医療援護を行う「原子爆弾被爆者の医療などに関する法律」(原爆医療法)が制定され、被爆者健康診断、原爆に起因する疾病等に対する医療費の保障等が始まった。

1958年(昭和33年) 10月21日 / 広島市広報課撮影 / 広島市公文書館所蔵

6 都市の再建

城下町であった戦前の広島は、格子の町割りとは狭い道路が特徴の街であった。原爆により瓦礫と化した街の復興計画では、大幅な街路の拡幅が要点となった。

私有地の土地を縮小し、道路や公園の用地を捻出する大規模な区画整理事業が行われた。地域ごとに順次進められた区画整理事業は、完了まで約20年を要した。

予算不足も深刻だった。国の特別支援を得るために、広島の復興を単なる戦災復興ではなく、「平和記念都市」の建設という新たな理念を掲げた復興計画とする特別法が、

1949年(昭和24年)8月、一地方公共団体のみに適用される特別法としては日本で初めて制定され、ようやく復興計画が動きはじめた。

復興が進むなか、河川敷には不法建築がひしめき合っていた。基町地区の本川沿いにはこうした住宅が1975年(昭和50年)頃まで残り「原爆スラム」と呼ばれた。

37 広島復興都市計画図

1946年(昭和21年)10月と11月に決定された都市計画街路や都市計画公園・緑地、土地区画整理区域が書き込まれている。中央の赤い線で囲われた部分が全壊・全焼した地域。

1946年(昭和21年)12月 / 広島市共済組合発行 / 広島市公文書館所蔵

38 相生橋の復旧工事

市街地の中心に位置し、原爆投下の目標にされたと言われる相生橋は、欄干が爆風で吹き飛ばされ、路面が激しく損傷した。被爆翌年の1946年(昭和21年)、とりあえず通行できるように応急工事が施された。

1946年(昭和21年) / 岸本吉太(よしした)撮影

39 中国配電(現中国電力)ビル屋上から北を望む 1945年(昭和20年)秋

中央左上には旧産業奨励館と相生橋が写っている。右下は宇品線の電車通り(現鯉城通り)。鉄筋コンクリート造の建物などが一部残るだけで、一面に瓦礫が広がり焼け野原となっている。

1945年(昭和20年)秋 / 岸本吉太撮影

40 中国配電(現中国電力)ビル屋上から北を望む 1947年(昭和22年)11月

写真39と同アングル。焼け跡にバラックが立ち、空地が耕されて畑になっている。鯉城通りが拡幅されようとしているところ。

1947年(昭和22年)11月 / 岸本吉太撮影

41 中国配電(現中国電力)ビル屋上から北を望む 1950年(昭和25年)4月

写真中央部分、画面を横切るように建物が除かれ、幅の広い道路が姿を現わしてきた(後の百メートル道路)。

1950年(昭和25年)4月 / 岸本吉太撮影

42 中国電力ビル屋上から北を望む 1953年(昭和28年)2月

百メートル道路の工事が進み、本線と両側のグリーンベルト、その両側の歩道の境界が分かるようになる。また、鯉城通りの拡幅工事でも進み歩道ができた。

1953年(昭和28年)2月 / 岸本吉太撮影

43 昭和天皇巡幸 護国神社入口で市民奉迎場に向かう昭和天皇の車を迎える市民

1947年(昭和22年)12月7日、昭和天皇が来広し市内を視察した。

市民奉迎場となった基町の市民広場(旧護国神社前)には、市民約5万人が集まった。天皇からは「広島市の受けた災禍に対しては同情にたえない。われわれは、この犠牲を無駄にすることなく、平和日本を建設して、世界平和に貢献しなければいけない」というお言葉があった。

1947年(昭和22年)12月7日撮影／「天皇陛下御来広の際の写真帖」より／広島市公文書館所蔵

44 昭和天皇巡幸 奉迎台の昭和天皇と集まった市民

1947年(昭和22年)12月7日撮影／「天皇陛下御来広の際の写真帖」より／広島市公文書館所蔵

45 広島平和記念都市建設法の住民投票を呼びかけるポスター

壊滅的な被害を受けた広島への復興には、国からの特別な財政的援助が不可欠であった。そこで、特定の地域だけに適用される特別法「広島平和記念都市建設法」の制定が構想された。

1949年(昭和24年)5月、この法律は衆参両院において満場一致で可決された。同年7月7日、法律制定の賛否を問う住民投票が行われ、投票率65%、賛成9割で成立した。広島平和記念都市建設法第1条には、平和を実現する理想の象徴として広島市を位置づけることが謳われている。

1949年(昭和24年)／ポスター／広島市公文書館所蔵

46 京橋川沿いに立ち並ぶ平和アパート

昭和町(現中区)の平和アパートは市営住宅として初の鉄筋コンクリート造で建設され、1950年(昭和25年)から1951年にかけて完成した。

1951年(昭和26年)／広島市広報課撮影／広島市公文書館所蔵

47 平田屋川の埋め立て工事

平田屋川は、江戸時代から城濠や水運用水路として活用された人工の川。明治以降は本来の役割が必要とされなくなり、戦後この川を含んだ土地が道路として計画された。川は下水道を敷設して埋め立てられ、道沿いは商店街となった(現並木通り)。

1952年(昭和27年)5月8日撮影／広島市都市整備局都市機能調整部市街地再開発担当課所蔵

48 完成したマッカーサー道路(紙屋町交差点)

元軍用地を貫通して新設された幅員40メートルの道路(現在の鯉城通りの北端部分)。1949年(昭和24年)5月には、イチヨウヤクスノキが植栽されたグリーンベルトが姿を現した。西練兵場跡に「マッカーサー・スタジアム」建設の構想があったことなどから、「マッカーサー道路」と

呼ばれるようになった。

1952年(昭和27年)9月30日／広島市広報課撮影／広島市公文書館所蔵

49 紙屋町交差点 1958年(昭和33年)6月

写真48と同じアングルの6年後の写真。交差点北西側に1957年(昭和32年)7月に完成した広島バスセンター、その後ろには中国電気通信局の総合庁舎、さらにこの年復元された広島城天守閣が見える。画面上部右端には、1956年に完成した広島県庁の建物が写っている。

1958年(昭和33年)6月24日／広島市広報課撮影／広島市公文書館所蔵

50 八丁堀一帯、電車通りの道路拡張工事

区画整理の進展に伴い、市内中心部では道路の拡張工事が行われた。福屋百貨店前の電車通り(現相生通り)では、幅員を広げるため住居や店舗が取り除かれた。画面中央の福屋旧館等が除去された後、電車軌道が道路の中央線に移された。

1953年(昭和28年)7月21日／広島市広報課撮影／広島市公文書館所蔵

51 比治山から平和大通り(百メートル道路)を望む

百メートル道路は鶴見町(現中区)から福島町(現西区)に至る3,570m(橋梁を含む)の道路を指す。防災道路として、特にグリーンベルトの役割を有する空間として計画された。幅員が100mであったため、「百メートル道路」と呼ばれた。1951年(昭和26年)11月には市民から名称を懸賞で募集し「平和大通り」に決まった。

1955年(昭和30年)4月／大段徳市撮影／広島市市民局文化振興課所蔵

52 百メートル道路の緑化

百メートル道路は早くから用地が確保されたが、予算不足から長らく空き地の状態で放置されていた。市長の発案により、県内外から緑化のための樹木の提供を呼びかける「供木運動」が展開された。提供された樹木は百メートル道路のグリーンベルトや平和記念公園に植えられた。

1957年(昭和32年)11月27日／広島市広報課撮影／広島市公文書館所蔵

53 完成した広島市民球場

1957年(昭和32年)、経済界の寄付で夜間照明付きの球場が建設された。

戦後プロ野球が復活し、1950年、地元球団カープが誕生したが、球団の経営は最初から苦しかった。球場の入り口には、募金を集める酒樽が置かれ、少年はグラブを買うための貯金を寄付した。豊かではなかった市民にとって、カープの歴史は忘れがたい広島復興史の一頁でもあった。球場は7月20日に完成し、22日に竣工式が行われた。

1957年（昭和32年）7月22日撮影／広島市公文書館所蔵

54 落成した市民球場と原爆ドーム

1957年（昭和32年）7月22日、広島市民球場の竣工式が行われた。当時の市民球場は一塁側と三塁側の内野スタンドが低く、スタンドから原爆ドームを望むことができた。

1957年（昭和32年）7月頃／みづま工房撮影・所蔵

55 広島復興大博覧会の開催

広島復興大博覧会は、広島市の復興の現状と産業や観光を紹介し、科学・産業・貿易・文化の精華を集めて展示することを目的に、1958年（昭和33年）4月1日から5月20日までの50日間、平和記念公園、広島城跡、平和大通り一帯を主会場に開催された。写真は第一会場になった平和記念公園。

1958年（昭和33年）／大前静治撮影／広島市公文書館所蔵

56 完成した基町の高層アパート群と本川沿いの不法住宅

河岸が緑地として徐々に整備されるなか、そこに建てられていた不法建築も撤去された。基町（現中区）の「原爆スラム」と呼ばれた地区は、1970年代までその姿が残されていた。背後の高層アパート群は、この地区の住民等の住居として整備された。こうして、ようやく広島は戦災復興事業は完了した。

1970年代前半（昭和40年代後半）／明田弘司撮影（寄託資料）

7 平和のデザイン

かつて繁華街であった中島地区には、平和記念公園が整備された。この公園の設計は1949年（昭和24年）4月に募集されコンペにより東京大学の丹下健三グループの作品が1位に選ばれた。

丹下氏のデザインは百メートル道路（平和大通り）を正面に見るように立つと、広島平和記念資料館の列柱廊と慰霊施設であるアーチの塔を透かして原爆ドームが見通せるように施設が配置されていた。現在、アーチの代わりに植輪型の屋根を持つ慰霊碑が設置されているが、平和記念資料館、慰霊碑、原爆ドームを一直線上に配置したデザインは「丹下の軸線」とも呼ばれている。

また、平和記念公園の入口となる元安川に架かる平和大橋、本川に架かる西平和大橋の高欄は、いずれも日系アメリカ人の彫刻家イサム・ノグチがデザインし、平和大通りを象徴する橋となっている。これら、丹下氏らの構想に基づく南北軸と平和大通りの東西軸は「平和の軸」として広島市の街づくりをする上で、その理念が継承されている。

57 丹下(たんげ)健三グループの平和記念公園設計競技当選案の模型

1949年（昭和24年）5月、広島平和記念都市建設法が国

会で可決された。これと並行して広島市は、中島地区の公園を広く設計競技にかけるとした。7月20日の締め切りまでに145点にのぼる案が提出され、東京大学建築学教室の丹下健三グループの案が1位に選ばれた。この模型は後に作成されたもの。

1950年（昭和25年）頃撮影／広島市公文書館所蔵

58 Peace Park Project

丹下健三らが構想した平和記念公園等の全体図。

百メートル道路（平和大通り）、平和記念公園に続く現在の中央公園や市営基町高層アパートの敷地を含む広い範囲を対象とした構想。児童センター、体育館、プール、サッカー場等のスポーツ施設、博物館、屋外劇場等の文化芸術施設が城を取り囲むように配置されている。

1950年（昭和25年）5月25日作成（推定）／図面／広島市公文書館所蔵

59 完成した原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）と原爆ドーム

平和記念公園競技設計案の原爆慰霊碑はアーチに鐘を吊るすデザインだったが、経費等の問題から植輪型の現在のデザインとなった。1952年（昭和27年）8月6日除幕。慰霊碑内の石棺には、亡くなられた被爆者の名簿がおさめられている。

1952年（昭和27年）9月16日／広島市広報課撮影／広島市公文書館所蔵

60 原爆死没者慰霊碑碑文

慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」の文字が刻まれている。

1952年（昭和27年）8月21日／広島市広報課撮影／広島市公文書館所蔵

61 原爆死没者慰霊碑碑文の英訳を伝えるはがき

原爆慰霊碑の碑文を作成した雑賀(さいか)忠義広島大学教授から広島市職員にあてたはがきには、英訳決定の経過と碑文の英訳が記されている。

<はがき裏面に記されている碑文英訳>

Let all the souls here rest in peace; For we shall not repeat the evil.

1952年（昭和27年）頃／雑賀忠義発藤本千万太宛はがき／広島市公文書館所蔵

62 慰霊碑に献花するドジャース選手団

慰霊碑には国内外の著名人が訪れ献花をしている。1956年（昭和31年）には、日米親善野球で広島を訪れたアメリカの球団ブルックリン・ドジャースの選手たちが慰霊碑内で石棺に献花した。

1956年（昭和31年）11月撮影／広島市公文書館（水馬愛子寄贈）

63 完成した平和大橋と原爆ドーム

平和記念公園の両側に架かる橋の名称は、平和大通りと同じく懸賞で募集され、それぞれ「平和大橋」「西平和大橋」に決定した。

橋の高欄は、日系アメリカ人の彫刻家イサム・ノグチのスケッチをもとに設計された。写真の中央に原爆ドームが見える。

1952年(昭和27年)10月8日/広島市広報課撮影/広島市公文書館所蔵

64 西平和大橋の建設現場を視察するイサム・ノグチと丹下健三

右端が平和記念公園を設計した丹下(たんげ)健三、平和大橋と西平和大橋の高欄をデザインしたイサム・ノグチは右から3人目。

1951年(昭和26年)11月27日/広島市広報課撮影/広島市公文書館所蔵

65 整備されつつある平和記念公園

商工会議所屋上から南方を撮影したもの。原爆ドームの後ろに平和会館、右隣に建設中の平和記念資料館が見える。ドームの右上空にかすかに似島が写っている。

1953年(昭和28年)8月5日/広島市広報課撮影/広島市公文書館所蔵

66 完成を待つ原爆資料館

競技設計では平和記念陳列館と称され、丹下(たんげ)健三が記念陳列館と呼んだ原爆資料館(広島平和記念資料館)は、1951年(昭和26年)に着工し、1955年8月に竣工、8月24日に開館した。

1954年(昭和29年)12月2日/広島市広報課撮影/広島市公文書館所蔵

67 平和記念公園全景 1958年(昭和33年)7月31日撮影

中央には1955年(昭和30年)6月に開館した平和会館、同年8月に開館した平和記念資料館、同じく3月に開館した広島市公会堂が写っている。平和記念公園から民家が立ち退き、植樹により緑が増えている。

1958年(昭和33年)7月31日/広島市広報課撮影/広島市公文書館所蔵

8 平和都市への歩み

広島での平和の実現を目指す取り組みは、1949年(昭和24年)の「広島平和記念都市建設法」成立以前から始まっていた。

1947年(昭和22年)8月に開催された第1回平和祭(中止となった1950年(昭和25年)を除き、名称を変えながらも

以後毎年開催)では、原爆による犠牲者の慰霊だけでなく、世界平和の実現を訴えた。

1954年(昭和29年)、ビキニ水爆実験で第5福竜丸が被ばくした事件は、全国的な原水爆禁止運動へと発展した。翌年、広島で第1回原水爆禁止世界大会が開催され、「ヒロシマ」は世界的な核兵器廃絶運動のシンボルとなっていった。この大会により、被爆の実相と被爆者の窮状が広く知られることになり、被爆者救済の新たな動きにつながった。

また、原爆の被害を伝えるため、1949年(昭和24年)には原爆の熱線をあびた瓦や石などの遺物を展示する施設が基町の中央公民館内に開室した。後に平和記念資料館に引き継がれ、被爆資料や証言の収集、被爆体験伝承等の取り組みが続けられている。

68 第1回平和祭で平和宣言を読む濱井信三市長

被爆から2周年目にあたる1947年(昭和22年)8月6日、広島平和祭協会の主催により第1回平和祭が中島本町(現中区)の平和広場で挙行された。

平和祭では、平和の歌(現広島平和の歌。この年平和祭で歌うために公募された)の演奏・合唱に続き濱井信三広島市長が平和宣言を読み上げた。8時15分にはこの年除幕された平和の鐘が打ち鳴らされた。

1947年(昭和22年)8月6日/Stephen Kelen撮影

69 第3回平和祭のポスター

原子力の「平和利用」への期待を表すかのように、1949年(昭和24年)の第3回平和祭ポスターには地球上を回る原子核の図柄に「Peace Forever(恒久平和)」の文字があらわれていた。このポスターは広島市長のサインを添えて世界の161都市に送られた。

1949年(昭和24年)作成/ポスター/広島市公文書館所蔵

70 原爆記念館の被爆資料等の展示風景

1949年(昭和24年)9月、広島市は原子爆弾の被害を伝える原爆資料を展示するため、基町(現中区)の中央公民館の一室に「原爆参考資料陳列室」を開設した。翌1950年8月には中央公民館の隣に「原爆記念館」が完成し、現在の場所に広島平和記念資料館が開館するまでの間、ここで被爆した瓦や石などの資料が展示された。

1952年(昭和27年)8月27日/広島市広報課撮影/広島市公文書館所蔵

71 被爆10年目(1955年)の平和記念式典

この年8月6日から第1回原水爆禁止世界大会が広島で開催されたため、式典へも多くの大会参加者が出席した。5万人を超える人々が慰霊碑を訪れたとも言われている。平和記念資料館はこの月の後半ようやく開館したが、まだ公園内にはバラックが残っていた。

1955年(昭和30年)8月6日/明田弘司撮影(寄託資料)

72 第1回原水爆禁止世界大会

1954年(昭和29年)のビキニ水爆実験を契機に反核の草の根運動から原水爆禁止署名運動が全国で広がり、2500万人の署名を集めた。この署名運動の成功と被爆10周年を記念して、第1回原水爆禁止世界大会が広島で開催された。大会は広島市公会堂で1955年8月6日から8日までの3日間開催され、14か国の代表と日本国内の全46都道府県・97全国組織が参加した。

大会アピールでは、「原水爆が禁止されてこそ真に被害者を救うことができます」と訴えられ、被爆者の救済が大きく取り上げられた。

1955年(昭和30年)8月6日/明田弘司撮影(寄託資料)

73 第一次保存工事中原爆ドーム

原爆ドームの存続については、賛否両論があったが1966年(昭和41年)、広島市議会が全会一致で原爆ドームの永久保存を決議した。第1回の保存工事は、全国から集まった募金により1967年に行われた。

1967年(昭和42年)7月撮影/広島市公文書館所蔵

9 現在の広島

74 現在の原爆ドーム

原爆ドームは1996年(平成8年)12月、核兵器廃絶と人類の平和を求める誓いのシンボルとして、ユネスコの世界平和遺産一覧表に登録された。

2022年(令和4年)5月23日/広島市広報課撮影・所蔵

75 平和記念公園付近

2022年(令和4年)10月1日/広島市広報課撮影・所蔵

76 平和記念公園・市街中心部 西側から撮影

2023年(令和5年)2月27日/広島市広報課撮影・所蔵

77 広島城・市街中心部 北東から撮影

2023年(令和5年)2月27日/広島市広報課撮影・所蔵

78 原爆死没者の冥福を祈る灯ろう流し

2015年(平成27年)8月6日/広島市広報課撮影/広島市公文書館所蔵

戦前の街の賑わい

79 戦前の広島城天守閣(南面)

広島城は1589年(天正17年)に毛利輝元が築城を始め、江戸時代は藩主の居所、藩政の中心であった。天守閣は

1931年(昭和6年)に国宝に指定され、名所として市民に親しまれたが、1945年の原爆投下により倒壊した。

1935~1944年(昭和10年代)頃撮影/広島市公文書館所蔵

80 京口門付近の広島城外堀

中央右端に写っているのは京口御門櫓台(きょうぐちごもんやぐらだい)。毛利氏の時代に京都との往来に使用した門だったため「京口門」の名がついたといわれている。

広島城の外堀は明治以降埋め立てられ道路や宅地となった。ここも後に白島線の電車通りとなった。

1900年代後半~1912年(明治末期)撮影/絵葉書/広島市公文書館所蔵

81 埋め立てた外堀の上を走る市内電車

城下を東西に延びる外堀は埋め立てられ、1912年(大正元年)に路面電車の軌道が敷設された。路面電車は同年11月から運行を開始した。

電車の背景に見える石垣は外堀のもの。手前の電車は「御幸橋行」で、紙屋町交差点を南に曲がったところ。

1912年(大正元年)撮影/絵葉書/広島市公文書館所蔵

82 浅野家別邸「浅野泉邸」(縮景園)

浅野泉邸は、1620年(元和6年)に作られた藩主浅野家の別邸。庭園は縮景園と呼ばれ、当時の家老で茶人の上田宗箇が築造した。1940年(昭和15年)に浅野家から広島県に寄付され、一般に開放された。国の名勝。

1945年の原爆により樹木や建物は焼け、大きな被害を受けた。1949年から復旧が始められ1951年に開園した。

1912年~1926年(大正期)撮影/絵葉書/広島市公文書館所蔵

83 西国街道に架かる橋「京橋」

1927年(昭和2年)に架けられた広島市内で最も古い鋼橋。左奥には二葉山が見える。

1927年(昭和2年)8月/田部俊一撮影/個人蔵

84 広島東照宮

徳川家康を祀る神社。二代藩主光晟(みつあきら)が1648年(慶安元年)に造営した。1945年(昭和20年)、原爆により本殿・拝殿は焼失したが、唐門・翼廊は残った。

石段前の参道には桜が植えられており、「桜の馬場」と呼ばれる桜の名所だった。

1924年(大正13年)頃撮影/『広島市史 社寺誌』(1924年 広島市発行)より/広島市公文書館所蔵

85 明星院

真言宗の寺院。毛利輝元の生母妙寿院の菩提寺であったが、長州に移封後、福島正則が明星院と改めた。広島城の鬼門(東北)に位置するため、江戸時代は城の守護・祈祷所であった。右側に写っている建物は本殿。

堂宇は原爆により全て焼失。

1912～1926（大正期）発行／絵葉書／広島市公文書館所蔵

86 饒津（にぎつ）神社

浅野長政追悼のため9代藩主斉肅（なりたか）が建立した神社。1835年（天保6年）に造営された。中央にある二の鳥居の手前には藩士が献納した24基の石灯籠が写っている。原爆により社殿などは全て焼失した。

1920代後半～1945年（昭和戦前）撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

87 観古館

1913年（大正2年）、旧藩主浅野家所蔵の書画、武具や茶器などを展示する美術館「観古館」が浅野泉邸内に建てられ、市民にも公開された。1940年（昭和15年）、浅野泉邸とともに浅野家から広島県へ寄付された。

原爆により焼失。跡地のすぐ近くに、現在広島県立美術館がある。

1912年～1926年（大正期）撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

88 浅野図書館

1926年（大正15年）5月、旧藩主浅野家が小町（現中区）に開館した図書館。浅野家が所蔵していた約3万7000冊の図書をもとに、主に郷土に関する図書や記録を収蔵していた。1931年（昭和6年）に広島市に寄贈されたが、原爆により建物の外郭を残して焼失。疎開して焼失を免れた貴重図書の一部は、現在の広島市立中央図書館に受け継がれた。

1926年（大正15年）撮影／新築落成記念絵葉書／広島市立中央図書館所蔵

89 広島高等師範学校

高等師範学校は、中等学校（旧制中学・高等女学校など）の教師を養成するための学校。1902年（明治35年）、東京の高等師範学校に続く2番目の高等師範学校として開校した。広島にできた最初の高等教育機関。

1926年（大正15年）頃撮影／『広島県写真帖』（1926年 広島県発行）より／広島市公文書館所蔵

90 丁未（ていみ）音楽会の演奏

「丁未音楽会」は1907年（明治40年）、広島高等師範学校教授吉田信太によって結成された同校の音楽団体。自ら演奏会を行うほか、東京から一流の奏者を招いて演奏会を開催するなど、広島における西洋音楽の普及と向上に大きな役割を果たした。

1907～1945（明治40年～昭和20年）／広島市公文書館所蔵

91 広島文理科大学

広島文理科大学は1929年（昭和4年）、広島高等師範学校を母体に設置された。戦後、この大学を母体に広島大学が開校した。写真は鉄筋コンクリート造3階建ての本館。

原爆により外郭を残して全焼したが修繕され、1991年（平成3年）までは広島大学の理学部一号館として使用された。

1935年（昭和10年）頃撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

92 広島県立商品陳列所

ヤン・レツルの設計により建築され、1915年（大正4年）、広島県物産陳列館として完成した。1921年に商品陳列所、1933年（昭和8年）には産業奨励館と改称した。物産の展示販売のほか、美術展や博覧会の会場としても使用された。1930年（昭和5年）頃撮影／広島市公文書館所蔵

93 広島県立商品陳列所内部の様子 森永の無料ココアホール

1921年（大正10年）に開催された第4回全国菓子飴大品評会の際の内部の様子を撮影したもの。

1921年（大正10年）撮影／「第4回全国菓子飴大品評会写真帖」より／広島市公文書館所蔵

94 朝光会油絵展示会場となった広島県産業奨励館

1932～1944年（昭和7～19年）頃／大木茂撮影／広島市公文書館所蔵

95 元安橋付近の賑わい

1926年（大正15年）に完成した元安橋を東詰の横町（現中区大手町）から撮影したもの。橋の対岸は中島本町（現中区中島町）。

中島本町は明治以降も商店や映画館等が立ち並び繁華街だったが、被爆により壊滅的な被害を受けた。現在その全域が平和記念公園となっている。

1926年（大正15年）頃撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

96 相生橋付近の様子

1932年（昭和7年）に完成した軌道併用の相生橋を本川西詰めから撮影したもの。中央の白い建物は日赤広島支部、右端は広島県産業奨励館。

1939年（昭和14年）頃撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

97 広島本通り

広島本通りは西国街道の一部として16世紀末以降栄えた地区で、明治以降も中心的な繁華街の一つだった。1925年（大正14年）には電気の鈴蘭灯が据え付けられ、コンクリート造りの金融機関や小規模な洋風建築も建設されていたが、多くは江戸時代以来の町屋建築が並んでいた。

1935年（昭和10年）頃撮影／広島市公文書館所蔵

98 八丁堀の福屋百貨店付近の繁華街

右側の8階建ての建物は1938年（昭和13年）に開店した福屋百貨店新館。その奥の塔がある建物は中国新聞社本社。電車通りを挟んだ左側の建物は、1929年、広島初のデパートとして開店した福屋百貨店旧館。

1940年（昭和15年）撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

99 金座街の夜景

本通りと金座街が交わるあたりの夜景。金座街には鈴蘭灯が灯っている。

1920年代後半から1930年代前半頃（昭和初期）撮影／広島市公文書館蔵

100 新天地

新天地は、1921年（大正10年）に堀川町に誕生した娯楽場。1927年（昭和2年）には東に進展し、東新天地となり東西2か所となった。劇場・芝居小屋・活動写真館（映画館）、飲食店等が集まる盛り場だった。中央に見えるのは映画館「泰平館」、手前左手は芝居小屋「新天座」。

1920年代後半～1945年（昭和戦前）撮影／広島市公文書館蔵

101 広島駅前広場

広島駅（写真右）前の様子。左側の建物は郵便局。駅前には人力車や自動車が停まっている。写真左側では軍人が列をなしている。

1922年～1930年代（大正11年～昭和初期）撮影／絵葉書／広島市公文書館所蔵

102 県立広島商業学校野球チーム全国優勝歓迎風景

広島はスポーツが盛んで、特に野球では1930年（昭和5年）、県立広島商業学校が前年に続き夏の全国中等学校野球大会で優勝した。広島駅前では多くの市民が凱旋する生徒を出迎えた。

1930年（昭和5年）撮影／広島市公文書館所蔵